

国立民族学博物館の収蔵品⑧

武器をアートに

南部アフリカに位置するモザンビークでは、一九七五年の独立後一九九二年まで続いた内戦の結果、戦争終結後も大量の武器が民間に残された。現在、モザンビーク・キリスト教評議会（CCM）が中心となり、この武器を農具と交換することで回収し、武装解除を進めるとともに、回収された武器を用いてアートの作品を生み出し、社会の安定化に貢献しようという、「銃を鋸に」（TAE）というプロジェクトが進められている。

二〇一二年、このプロジェクトの一環として、日本に住む人びとへのメッセージを込めて《いのちの輪だち》（Cycle of Life）という作品が制作され、国立民族学博物館（民博）におさめられた。民博では、二〇一三年に企画展「武器をアートにーモザンビークにおける平和構築」を開催し、《いのちの輪だち》をはじめ、民博で収集した作品と、「銃を鋸に」のプロジェクトを支援してきた日本国内のNPO法人「えひめグローバルネットワーク」が所蔵する作品をあわせて展示し、アートを通じて平和を築く営みを紹介した（写真1）。その後、同展は、二〇一五年には東京・上野の東京藝術大学美術館でも開催された。

「銃を鋸に」のプロジェクトは、モザンビーク聖公会のデイニス・セングラーネ司教の発案で始められた。セングラーネ司教は、内戦終結後、国内を広く回るうちに、ある村の女性から、「戦争は確かに終わった。でも、無数の武器が私たちの周りに残っている。いつ戦闘がまた始まってもおかしくない。どうすればいいのでしょう」と問われたとい



写真1 《いのち輪だち》「武器をアートにーモザンビークにおける平和構築」展、国立民族学博物館、2013年6月

う。答えを探すうち、司教は、聖書イザヤ書に「剣を鋸に」という章句があることを思い出し、それにヒントを得て、民間に大量に残された武器を農具や自転車と交換し、武装解除を進めることに思いいたったという。プロジェクトは一九九五年から始められた。さらに、一九九七年からは、その回収した武器を分解し、それを素材にアートの作品を生み出す作業をアーティストたちと開始することになる（写真2）。

「銃を鋸に」のプロジェクトで、武器は農具や自転車、ミシンなどと交換されるが、とくに自転車については、過去十五年間、日本の松山に本部を置くNGOえひめグローバルネットワークが日本国内で集めてモザンビークに継続的に送ってきた放置自転車が武器との交換の対象になってきた。そこで、アーティストたちとのディスカッションの結果、民博で収蔵する作品は、自らの意思で武器を捨て、平穏な家族との時間を取り戻した人びとの生活を、武器と交換して得た自転車に乗る家族の姿で表現しようということになった。

作品は、フィエル・ドス・サントス、クリストヴァオ・カニャヴァー（ケスター）のふたりのアーティストとその助手たちの手で、二〇一二年十一月に三週間をかけて制作された。私たちはその作品を《いのちの輪だち》と名づけた。《いのちの輪だち》は、今後、民博本館のアフリカ展示場に常設で展示することを計画している。この作品が、それを見る人びとにとって、平和構築の営みを自らの問題として考える契機となることを願っている。

（吉田憲司）



写真2 溶接作業。マプト市、CCMにて。2012年10月、吉田憲司撮影